

稲沢市社会福祉大会を開催しました

去る2月22日、稲沢市社会福祉協議会、稲沢市共同募金委員会の共催により、名古屋文理大学文化フォーラムの中ホールにて「令和元年度稲沢市社会福祉大会」を開催しました。

大会では、日頃から稲沢市の社会福祉の発展に功績のあった141名(個人・団体)及び赤い羽根共同募金に多額の金員を寄付された91名(個人・団体・法人)に対しまして、表彰状及び感謝状を贈呈しました。

また、当日は近年、ひきこもりの長期化・高齢化が社会問題となっている「8050問題」にスポットを当て、講師に愛知教育大学大学院 川北 稔 准教授をお招きし、「8050問題の深層 ～限界家族をどう救うか～」をテーマにご講演をいただきました。

・稲沢市社会福祉協議会長表彰状	・・・75件
・稲沢市社会福祉協議会長感謝状	・・・66件
・稲沢市共同募金委員会感謝状	・・・77件
・中央共同募金会感謝状(伝達)	・・・2件
・愛知県共同募金会感謝状(伝達)	・・・12件



8050問題について考える

この「8050(はちまるごーまる)」とは、「80代の親と、ひきこもる50代の子ども」を表しています。

従来「ひきこもり」と言うと、10代・20代の若者の問題として捉えられがちでしたが、ひきこもりの問題が顕在化した1980年・90年代から30年ほど経つ現在、当時のひきこもり世代が社会に出る機会を逃したまま、今なおひきこもり続け、50代になろうとしているという例は少なくありません。

2019年3月、内閣府が発表した調査結果によりますと、自宅に半年以上閉じこもっている「ひきこもり」の40歳から64歳までの人数が、全国で推計61万3千人と発表されています。この数字は15歳から39歳までの推計人数の54万1千人を上回っていることから、ひきこもりの高齢化、長期化が鮮明になっていると言えます。

ひきこもってしまった子の生活を支えているのは親となるわけですが、最近では親の退職後、年金と貯金を頼りに食いつないできた親子がその後、経済的に困窮、社会的に孤立し、生活が立ち行かなくなる深刻なケースが目立ち始めています。

現在、本会が稲沢市から委託を受けて運営しています福祉総合相談窓口においても、同じような世帯のケース支援に関わることは珍しくありません。

『ひきこもりがちな人とその家族の問題』を、その当事者だけの問題として捉えるのではなく、地域全体で考える問題の一つとして捉えるきっかけにしていきたい。また、当事者世帯の孤立を防ぐために、私たちに出来ることは何なのかを、多くの皆様と共に考え、今後の新たな支援のカタチへと繋げていければと考えています。